

桜の聖母短期大学 第 61 回卒業式 学長式辞
2017. 3. 11 学長 西内みなみ

第 61 回生の皆様、ご卒業おめでとうございます。

今日の良き日は、皆様にとって特別な記念日となります。6 年前の 2011 年 3 月 11 日は、桜の聖母短期大学にとっても特別な日となりました。皆様お一人ひとりにとっても、特別な日として記憶に刻まれていることと思います。先ほど、皆様と共に黙祷を捧げさせて頂き、ありがとうございました。

6 年前の 3 月 11 日に思いを馳せてみましょう。

2011 年 3 月 11 日金曜日 2 時 46 分、私は本館 2 階の集会室で独りパソコンに向かっていました。明日の卒業式を控え、提出書類の印刷をして、メール送信と、思った瞬間に、大きな揺れ。広い集会室に独りでいた私は、慌ててパソコンの置いてある机の下に潜り込みました。

数分が、数時間にも感じた揺れが少しおさまると、まず、その日、卒業式のリハーサルに来て、残っている学生たちのところに駆けつけました。

卒業式を明日に控えた 200 名以上の学生たちは、卒業式に着用するキャップとガウンを身に着けたまま、校舎から出て、短大敷地内のキャンパス広場という避難場所に集まっていました。

余震が続き、さらに吹雪いてくる中、教員たちは、クラス毎に学生を点呼し、校舎内に誰も残っていないかどうかを確認しました。

隣接している学童保育所からも、子どもたちが泣き叫びながら避難してくると、卒業生たちは、身にまとったガウンを子どもたちにかけて、「大丈夫だよ。大丈夫だから」と、優しく抱きかかえていました。恐怖と寒さに震える子どもたちを、暖かく励ます姿は、愛する子どもたちを目の当たりにして、学生たちが愛と奉仕の精神で満たされていることを、私に気づかせてくれました。

この地震が、空前絶後の歴史的被災の始まりであることが、次第に分かりました。全ての交通手段は断たれ、携帯電話はつながりません。

帰宅する手立てがなかったり、一人暮らしで怖くてアパートに戻れない約 120 名の学生は、ライフラインの電気と水があり、そして暖房の効いている暖かい短大の一階学生ホールで、保護者からの連絡や迎えを待つことになりました。

普段は、400 名近くが昼食をとることのできるスペースである学生ホールが、仮設の避難所になりました。繰り返し襲ってくるどんな余震にもビクともせず、学生たちを守ってくれました。

栄養士養成をしている教職員たちは、栄養士の卵の学生たちを集めて、調理実習室で炊き出しを始めてくれました。お塩の効いた温かいおにぎりの美味しかったこと。学生が情報を得られるように、学生ホールにテレビやラジオも設置しました。保育の授業の教材であるマットや布団、枕を段ボールの上に並べ、学内中から毛布や布を集めて学生たちが眠れるようにしました。

明け方まで、次々と迎えに来て下さる保護者達。普段なら一時間ぐらいで来られる道のりを、崩落や亀裂により道路が通れなくなり、渋滞のため 5 時間近くかかったという方ばかりでした。迎えの来た学生をマイクで呼び出すと、それまでの緊張の糸が切れたように、泣き出す学生もいました。有難いことに、帰宅する途中に住んでいる学生を、送って行って下さる保護者ばかりでした。最後の頃には、「どこどこ方面に帰りたい人いますか」と、マイクで呼びかけをするようになりました。気がつけば、卒業式当日になるはずだった翌日の昼過ぎ、残る学生は数人になりました。

あんなに濃密な時間を学生と共に過ごせた時はなかったと思います。教職員全員が、一人ひとりの学生とその家族のことを思い、無事を喜び合い、これからを励まし合い、再会を誓い合って、一人ひとりを、心をこめて桜の聖母短期大学から送り出しました。

桜の聖母短期大学第 55 回生の 3. 11 は、大震災という真っ暗闇に灯った、希望の光だと、その時に実感しました。

第 61 回卒業生の皆様、

ご存じのように、本学の本館正面玄関には、世界に一つしかない美しいステンドグラスがあります。そこに描かれた「ご訪問の聖母マリア」の精神、それは、心配な方がいたら、妊娠している我が身を省みず、ご訪問する、この愛と奉仕に生きる聖母マリアの精神、そして、それに倣って 360 年前、日本は、まだ江戸時代です。フランスから、大西洋を船で 2、3 か月もかけて、未開地のカナダに、出かけて行って、多くの子どもたちや大人たちに教育を授け、愛と奉仕に生きた聖マルグリットブルジョワの精神です。

聖マルグリットブルジョワの設立した修道会は「コングレガシオン・ド・ノートルダム」聖母マリアの修道会といえます。この修道会は、未開地だったカナダの発展に大きく貢献しました。聖マルグリットブルジョワは、カナダの方なら誰でも知っているシスターであり、聖人であり、カ

ナダでは建国の母として敬愛されています。そして、何よりも、優れた教師でした。

カナダの建国に大きな貢献をした聖マルグリットブールジョワの修道会が、1932 年、今から 85 年前、5 人のシスター達を日本に派遣して下さいました。それが、東京でも、仙台でもなく、この私たちの街、福島市に、です。これも奇跡です。

福島市に修道院を開設され、まず、幼稚園を、そしてその子たちが進学する小学校を、中学校を、高等学校を次々と開設し、その高校生たちに高等教育を受けさせたいという願いから、62 年前、1955 年に開設された学校が、この桜の聖母短期大学です。カナダの修道会から、派遣されたシスター達も、福島の子どもたちや大人たちのために、愛と奉仕に生きて下さいました。

この歴史と伝統によって、今日、私たちは、61 回生の皆様の卒業をお祝いすることができるのです。

第 61 回生の皆様は、皆様を含めて 11,565 名の卒業生がそうであるように、「愛と奉仕に生きる良き社会人」として、美しく成長され、今日、この学び舎を巣立っていけます。

先ほど、朗読された聖書のみ言葉、その時代背景やキリスト教の価値観については、2 年間でしっかりと学んで頂きました。ただ、聖書に書かれた昔話ではなく、そのみ言葉は、今も生きて、この桜の聖母短期大学で働いている事を、皆様は、この 2 年間で実感して頂けたでしょうか。

(ヨハネによる福音：15 章 1-3、11-17 節)

「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。」

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。」

「互いに愛し合いなさい」このみ言葉が繰り返し述べられています。卒業生の皆様は、この 2 年間で「互いに愛し合う」ということを実感して頂けたでしょうか。

私は、皆様と 2 年間で共にして、皆様が「互いに愛し合っている」ことを、日々、強く実感させて頂きました。

毎朝出勤すると、「ごきげんよう」とご挨拶して下さる皆様の笑顔に、皆様が眼を輝かして、身を乗り出していた様々な授業で、楽しそうにおしゃべりの花を咲かせているランチタイムのカフェテリアで、人が変わったように真剣な表情のスポーツ大会の体育館で、大成功だったあかしや祭でのエンディングの涙の中で、皆様同士が互いに愛し合っていることがよく分りました。

さらに、皆様は、キャンパスを出て、地域社会や様々なコミュニティで、多くの方々と愛し合って下さいました。国見町では幼児から高齢者まで関わり、震災の被害を受けた熊本まで義捐金を届け、さらに、沖縄の人々と国際平和を祈り、修道会本部のあるカナダでは国際ボランティアをされました。

皆様が様々な方々と互いに愛し合うことによって、建学の精神である「愛と奉仕に生きる」ことを実践的に学んで下さったことが、よく分りました。この 2 年間、私たち教職員に、皆様の成長を喜ぶ幸せを頂いたことに、心から感謝します。

61 回生である卒業生の皆様

これからの人生という大海原で、お幸せな時、嬉しい時、楽しい時は、桜の聖母短期大学の事を忘れていて下さい。しかし、あなたの人生で、苦しい時、辛い時、悲しい時には、母校である桜の聖母短期大学のことを思い出して下さい。そして、何時でもいらして下さい。卒業生になられる皆様の、両手を広げてお迎えできる母校で在り続けることをお約束します。

保護者の皆様、高いところから、たいへん恐縮ですが、大切なお嬢様のご卒業、おめでとうございます。お嬢様のご卒業まで、多大なるご支援を桜の聖母短期大学に賜りました保護者の皆様に、深く感謝します。

また、ご多忙中、ご臨席を賜りましたご来賓の皆様、兼任教員の皆様にも御礼申し上げます。桜の聖母短期大学のこの歴史と伝統を大切に継承し、さらにより良い教育活動をしていくことを、お誓い申し上げます。

61 回生の卒業生の皆様とそのご家族に、そしてこの桜の聖母短期大学に集うお一人ひとりに、主イエスキリストと聖母マリア、そして聖マルグリットブールジョワの豊かな祝福をお祈りして、式辞といたします。